

Let's Know Hiroshima Castle.

# しろうや! 広島城



No.34

## 日本刀を鑑賞してみませんか

企画展「備後と安芸の刀と鐺～鎌倉から現代まで」を終えて

広島城では平成24年9月15日から10月21日まで、「備後と安芸の刀と鐺<sup>つば</sup>～鎌倉から現代まで」と題する企画展を開催しました。日本刀やその制作技術の保存のために活動されている日本美術刀剣保存協会広島県支部との共催によるもので、鎌倉時代から現代にいたるまで、現在の広島県域で作られた刀54口と鐺38点を紹介しました。これだけの数の日本刀を一度に見られる機会はないといえますが、展示担当者として気になっていたのは、熱心に鑑賞されるお客様がいる一方で、ほとんど素通りされる方々も少なからずいらっしゃることでした。

### 美術品としての刀

日本刀(以下、単に刀とします)というと、きれいとかよく切れるといったイメージを持っている一方で、怖い、近寄りたいたいといったような思いをされている方も多いと思います。それは刀が本質的に武器であることによると思われるのですが、刀を縁遠くしている最大の要因は、刀に対してどう向き合えばよいかかわからない、ということにあるのではないのでしょうか。

刀は武器であると同時に美術品でもあるといわれますが、絵や彫刻、書など、見て直観的というか、わかりやすく美しさを感じ取れるものと違い、それを美しいと思えるようになる、すなわち美術品としてとらえる感覚や能力をもつことにはそれなりの訓練が必要です。刀のどこをどう見たらよいのか、手近なナイフや包丁とどこが違うのか、それがわからないままでは、刀はどれも同じようなものにしか見えません。ところが一般の人が一番手軽に刀を見ることが出来る博物館などの展示施設でさえ、キャプションなどの解説文は難解で、とても初心者が理解できるようなものではないものが多いのが現状です。見ようとする意欲を持っている人たちに対し、見てもらう側は他の美術品よりなお一層、それをサポートする努力をしなければならないと思います。

刀 銘 (表)芸州住藤原兼先 (裏)寛文四年甲辰三月日 個人蔵 広島城寄託

芸州(安芸国=現在の広島県西部)を拠点としていた藤原兼先という刀匠が、寛文4年(1664)3月に制作したという意味の銘が切られている刀です(制作年代は裏側にあります)。刃文がはっきりとしているのが特徴で、小さな波型の模様が連続している「互の目」と呼ばれる刃文の一種です。

(以下、刀の部分写真は全て本刀のものです)



## 刀の見方

そこで、ここでは「刀の見方」について、刀の世界に入り込む第一歩となるような基礎的なことをいくつかご紹介していきたいと思います。なお、刀にはいろいろと種類がありますが、ここでは一応現代の分類でいうところの太刀や刀(長さがおおむね60cm以上のもの)を想定してお話しします。

### 姿

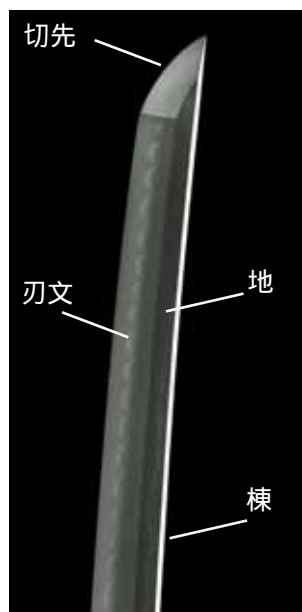
要は全体的な形ですが、ポイントの一つになるのは「反り」です。刀らしさを表すもっとも重要な要素の一つです。反りは、切断能力を高めるといふ実用面での効果もありますが、反りの大きさや、ピークが刀のどのあたりにあるか、で見た目の印象がずいぶん変わってきます。

例えば、反りが大きく、ピークが刃元側にあるもの(腰反り、といいます)は、どっしりとした、優雅な印象を受けます。一方で、先の方にピークが移った(先反り、といいます)刀は、スピード感を持った機能的な形といえるでしょう。もちろん、ピークが中ほどに来るものもあります(中反りとも鳥居反りともいいます)。バランスのとれた落ち着いた印象を受けます。

外形的には、他にも長さや幅、およびそのバランス、切先の大きさや形などがポイントとなりますが、ここではこのぐらいにとどめておきましょう。

### 刃文

これも刀らしさを表す特徴的な要素である鑑賞ポイントです。まず、模様「形」としてはまず直刃と乱刃とに分類できます。直刃は、まっすぐな刃文のことです。これに対して乱刃は曲線が連続するもので、その模様によって丁子、互の目、湾れなどなど色々な名称がつけられています。さらにはこの刃と地との境目付近や刃の部分には、粒子状あるいは霞がかった模様が見え、それらをそれぞれ沸とか匂いと



刀各部の名称

か呼んで、これも鑑賞のポイントとしています。

### 地

一目で目に飛び込んでくる「姿」や「刃文」と違って、これは少々レベルが上がります。刃文から棟にかけての部分(地)と呼ばれます。そこは、一見ツルツとした鏡のように見えますが、明るいところでよく見てみると、いろいろな模様が現れています。縞模様であったり、年輪状であったり、細かい粒子状であったりなどなど、決して無地ではない場合が多いのです。木の板になぞらえて板目とか空目、柂目と表現されます。

刃や地には、様々な模様など、「はたらき」と総称される、鑑賞ポイントがほかにもたくさんあります。ここではこれ以上触れませんが、たいていの解説書に出ていることなので、第2歩を踏み出そうという方は、参照しながら鑑賞してみてください。

### 茎

普段は柄に隠れている部分、茎に目を向けてみましょう。この部分には普通、刀匠が銘とよばれる文字を刻んでいます(銘を切る、といいます)。刻まれる内容は作者名、制作時期などが中心になります。いわば刀匠のサインであって、絵画や書における落款にあたるものといえるでしょう。そして、この文字はそれぞれの刀の名称として、「刀 銘 ...」などと表記されます。



芸州住藤原兼先の茎・銘

## 刀づくりの工程と鑑賞ポイント

ではなぜ、これらの点が鑑賞のポイントとなるのでしょうか。それには刀がどのように作られるのか、ということが密接に関係してきます。

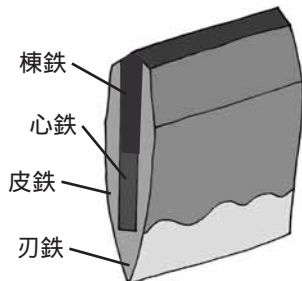
刀は玉鋼という貴重な鉄を主体とした材料を、刀匠が何度も何度も熱を加えながら折り返して叩き(折り返し鍛錬)不純物を取り除いて良質な材料に仕上げるといふ、鍛造という方法を用いて作られます。単に鉄を型に流し込んで形を作る(鑄造)とい

ます)ようなものではありません。

さらに「折れず、曲がらず、よく切れる」という刀の特徴を高度に実現させるため、外側(皮鉄)内側(心鉄)あるいは刃の部分(刃鉄)・棟の部分(棟鉄)にそれぞれ異なる鉄が用いられます。これらを叩いて一体化させたのち、刀の形を整えていきます。どれだけどのように折り返すか、異なる鉄の組み合わせをどのように行うか、それは刀匠によって様々です。

こうした工程を経て、いよいよ刀作りのクライマックス、焼き入れと

なります。焼き入れにあたり、刀身に刃文を出すための「土置き」が行われます。刃文を想定しながら特殊な土を塗るというもので、ここにも当然刀匠の個性が現れます。その後刀身は約800 近くまで加熱され、一気に水冷されます。この際、土の塗り方の厚さによって冷え方に違いが生じ、刀身に様々な変化が起きます。例えば刃側は土が薄いので急冷され、硬度の高い組織となって、かつ膨張します。これで反りが生じます。



刀の断面図の一例

一方棟側は比較的ゆっくり冷やされ、刃側とは違って軟らかめの組織になります。このような刃側と棟側との組織の違いが影響して刃文や沸、匂などの「はたらき」が現れるのです。また、折り返し鍛錬によってできた幾重もの層のでき方、材料の組み合わせ方も焼き入れによって模様に影響するといわれます。

このような工程を経て生み出される刀は、一点一点刀匠が理想を追い求めて鍛え上げた成果であり、どれ一つとして同じものはありません。武器としての性能を極限にまで高められたものというだけでなく、その個性が現れた美意識の結晶ともいえます。茎に切られた銘はその自信の表れにほかなりません。刀が工業製品ではなく、美術品としてとらえられるゆえんです。

どのような美術品もその鑑賞は奥が深いものです。刀も例外ではありません。ただ、これまで述べてきたようなことをちょっと気にかけるだけでも、刀の見方はずいぶんと変わるはずで、これを読んでいたことを縁として、幅数センチの世界から放たれる光 - 刀匠の思い - にぜひ向き合ってみてください。(大室謙二)

## 刀が語る、ある広島藩士の江戸詰め暮らし

~新着收藏品オススメ紹介 松尾秀任作の刀・短刀~



刀 銘(表)芸州士 松尾秀任 (裏)文久三年(1863)八月日 刃長70.3cm 反り1.8cm

初夏の風吹く季節、刀1口と短刀2口が広島藩士平田信之丞の子孫、平田正昭氏から寄贈され、広島城収蔵品の仲間入りとなりました。

その3口の刀の茎の銘には、いずれも「松尾秀任」という幕末の刀工による銘がありました。寄贈者も代々大切にしてきた刀がなぜ「松尾秀任」という人ばかりによって作刀されているのか、ずっと疑問に思ってきたようです。

そこで解明の糸口の一つになったのが、広島藩士の役職名と名前が記載された『復刻 芸藩輯要 附

藩士家来名鑑』という書籍でした。

それを見てびっくり仰天！江戸常勤者の平田信之丞の役職「御納戸奉行格 御住居附御広式御用達添役」同欄の上司名に「松尾助之丞」とあるのです！「秀任」とは刀工としての作者名であり、本業は江戸の広島藩邸奥向き管理の役所に勤める松尾助之丞という武士だったのです。

さらに昭和5年(1930)の『広島蒙求次編巻下』(小鷹狩元凱著)には彼について以下のように紹介しています。

「江戸赤坂の広島藩浅野家中屋敷内に住む松尾助之丞は、壮年の頃大変貧しかったので、元来手先が器用なのを活かして鍛冶仕事を始め、最初は釘・小刀包丁等を作り、これを内職にして家計の足しにしていました。そのうち、武士としては潔よい仕事ではない、恥ずかしくない物を作りたいと麹町(四谷の間違いか。筆者注)に住む刀工の元へ行き、その技術を習得した」とあります。

この刀工というのが、幕末の新々刀最高位の刀工の一人である「源清磨<sup>みなもとのかよまる</sup>」と思われま。赤坂から四谷は1km前後の距離。秀任はきっと足繁く通ったことでしょう。時は黒船来航で国内動乱の最中、いつ戦になるやらと刀の注文が殺到し、もはや内職とは言えない程の忙しさだったようです。

と、そこで寄贈者、調査協力者の刀研師 森脇明彦先生と筆者は幕末の江戸を舞台に、二人の広島藩士についてさまざまな想像を駆り立ててしまいました。

武士の魂である刀は、上・下級武士を問わず必需品ですが高価なものです。そこで信之丞は、一世代の刀と短刀を上司の秀任に託します。秀任は信之丞を想い、彼に見合う刀を作ったのでしょう。短刀の茎には「応需 平田広信 松尾秀任作是」(広信=信之丞の注文に応じ、秀任がこれを作る)とプロ並みの腕で銘を切っています。これ以外で今現在、



短刀 銘(表)応需 平田広信 松尾秀任作是  
(裏)慶応元年(1865)乙丑歳八月日  
刃長 29.1cm 内反り



茎

発注者を銘に切った秀任の刀は未確認です。職場環境も良く、二人は熱い信頼関係で結ばれていたのではないのでしょうか？

明治となり江戸常勤者も藩命により、広島へと帰され、信之丞そして秀任も家族と共に先祖代々住んだ江戸を去ります。武家の証である刀への信之丞の想いは子孫へと受け継がれ、太平洋戦争中も疎開をさせ、その後も広島の自宅で守り続けてきました。

この秀任作の刀と短刀は、広島城収蔵品展「蔵出し！武士の表道具・奥道具」(12/14～平成25年2/11)にて公開します。ぜひ、ご覧ください。(山縣紀子)

もっと刀を知りたい方はこちらの1冊を

新刊

「備後と安芸の刀と鐔<sup>つば</sup>」

鎌倉時代から現代まで、備後・安芸地方で作られた刀と鐔の紹介

編集・発行 日本美術刀剣保存協会広島県支部

A4版54ページ  
(オールカラー)  
価格 1,800円

広島城ミュージアム  
ショップにて発売中。

郵送をご希望の方は、  
広島城天守閣へご連絡  
ください。  
支払方法等をお伝えし  
ます。



広島城では今年度、正月休みの期間中に観光客や帰省した人々たちへのおもてなしの向上を図ることを目的に、下記のとおり年始開館を試行的に拡大して実施します。



平成25年1月1・2日(火・祝、水)は9:00～17:00

1月3日(木)は9:00～18:00

入館は閉館の30分前まで

しろうや  
!  
広島城

編集・発行

財団法人広島市未来都市創造財団  
広島城

〒730-0011  
広島市中区基町 21-1  
電話：082-221-7512  
FAX：082-221-7519

平成24年12月20日発行

広島城利用案内

開館時間：9:00～18:00

(12月～2月の平日は9:00～17:00)

入館の受付は閉館の30分前まで

入館料：大人360円(280円)

小人180円(100円)

( )内は30名以上の団体料金

休館日：12月29日～1月2日(臨時休館あり)

ホームページ <http://www.rijo-castle.jp>



携帯サイト

「しろうや！広島城」のバックナンバーは、広島城のホームページからダウンロードできます